

あとがき

本書の第2章から第6章がわたしのライフワークであり、そして、もっとも書きたかったテーマが「宗教的自立」の問題です。

わたしの人生のターニングポイントになったフェミニズムに出逢ったこと。そして、そのジェンダーの視点と重なり、生まれたときから身近にあった親鸞の思想にきちんと出逢えたこと。その二つを支柱にして生きてきたわたしは、第6章で記した「宗教的自立」を長い間、課題にしてきました。フェミニズムがいう自立を目標にすることはもちろんですが、とくに日本人にとって「宗教的自立」が必要だと考えてきました。

なぜなら、わたしが過去において、まず、フェミニズムがいう「個」の確立ができていなかったからです。もう一つは、信心(信仰)をもたねばならないと苦しみ、束縛されていたからです。その二つの確立と解放を求めて生きてきたことをわたしのライフワークにしたかったのです。

その二つを「宗教的自立」ということばを創って伝えたいと思いました。それは、「信仰をもたない」と公言する多くの日本人の宗教観にも関係すると思います。その意味では、信仰のあるなしにかかわらず、ひとりの人間として「宗教的自立」を求めることは必至であると、わたしは考えてきたからです。

ところで、本書は、「宗教的自立」などのわたしのライフワークから始まってはいません。第1章は、ライフワークではない内容をもってござるを得ませんでした。

2018年11月28日、その日に忘れることができませんでした。思いもしないことがわたしの身の上になりました。人生とは何がおこるかかわらないといいます。それは悪いことが多いものです。自然災害の被災者、いろいろな暴力の被害者、事故に遭うなど、想定しないことが身の上におこります。わたしにとって悪いことは、いきなりわたしが「被害者」になるようなことがおこったのです。それは予想もしていないことでした。

第1章で記した「東本願寺ギャラリー展差し替え事件」です。わたしが「被害者」というかからは、加害者がいるわけです。それが、東本願寺(浄土真宗大谷派)の教団のトップである宗務総長でした。東本願寺から要請を受け、わたしたち3人で作成した「経典に表れた女性差別」のタイトルのパネル3枚が、制作の過程では何も問題とされなかったにもかかわらず、展示直前の最終チェックの段階で突然はざされるといふ「事件」がおきました。それはわたしたちがやり遂げようとしていた「女性差別問題」を否定されることでした。そのことは、仏教、

経典、親鸞などの言説に女性差別が認められるにもかかわらず、それをないものにしようということを意味しています。

その知らせを受けたのが、2018年11月28日でした。内容を聞いて頭が真っ白になり、電話が終わったときに受話器をすぐに降ろすことができないほど、握りしめていました。

相手がだれであれ、守るべきものがないわたしなので、すぐに闘えるはずでした。しかし、実際に「被害者」という当事者になると、すぐには闘うことができませんでした。わたしの身の上におこったことを整然と捉えることができず、何をしてよいのかわからなくなってしまったのです。毎日毎日そのことが頭から離れず、時が経つにつれて、わたしにされたことに対して腹が立ち、怒りに苦しみました。何かをしなければならぬと思っても、その「何か」を思いつくことができないほど、思考力を奪われてしまいました。「こんなはずのわたしではない」という自問を繰り返し返すだけで、まったく思考停止の状態が続きました。

その苦しみからやるべきことを示唆してくれたのが、仲間でした。「事件」の話を聞いてもらい、落ち込むわたしを叱咤激励してくれた仲間がいなかったら、わたしは今回の「事件」を公にすることも闘うこともできなかったと思います。「抗議文」や「公開質問状」にも仲間が親身になって手を入れてくれました。それらは仲間とともにつくったものだと自負できます。本音で話ができる仲間は、ほんとうに大切であり、わたしの生きる支えになっていることを痛

感します。「ありがとう」を心から伝えたいです。

冷静に考えることができるようになったとき、わたしの闘いが始まりました。その間、1か月を要しました。そして、納得する闘いができたと思います。ただ、闘いはいちおう終わったものの、わたしがこの「事件」から立ち直るには、まだ足りないものを感じていました。前向きになれるわたしでした。「事件」の総括ができていなかったからです。

再度、わたしがやるべきことを自問しました。結果、わたしは「書くこと」が総括になり、前へ向いて生きることができると思いました。わたしにとって「書くこと」は、生きることだと気づきました。

わたしの闘いによって、東本願寺という教団の女性差別が解消されたわけでも、宗務総長が考えを翻したわけでもありません。実態は何も変わっていないといっても過言ではありません。わたしの闘いの相手は、あまりにも大きく、びくともしませんでした。

しかし、わたしがこの闘いを終えて、わかったことがあります。仏教界をはじめ、経典や宗祖や教団など仏教界に存在する女性差別を考えていこうという仲間が増えたことです。その確実な手応えを感じています。このつながりが、「浄土真宗十派をつなぐ女性の会」の結成になりました。それが、わたしの「宗教的自立」の確立でもあると思えるようになりました。

少なくない方々にとって、この「事件」が宗教界の女性差別の問題を考えるきっかけとな

りました。そのことを考えると、この「事件」を公にする意味があったと思います。

本書に登場する人は、すべて実名です。とくに第1章で、ともにパネルを作成した山内小夜子さんと近藤恵美子さんは、東本願寺の内部の「当事者」です。公にすること、名前を出すこと、原稿を読んでもらったことなど、すべてを了解してもらったうえでの実名です。感謝のことばだけではすまない思いがあります。本に著すことを承諾していただけなかったら、わたしは書くことができず、立ち直れていないかもしれません。

そして、実名で登場してくださったすべての方に感謝します。ともに今後の活動につながっていきたいと思います。

仏教・仏教界の女性差別を考えると、本書に記した浄土真宗だけではありません。仏教教団は多く、本山のもとに寺、壇信徒が所属しています。教団内で人権問題、とくに女性差別の問題にかかわろうとする人は、ほんとうに少なく、関心をもたない人がほとんどです。

教団内に議会がありますが、男性のみの議会が多く、「女人禁制」の議会といえるでしょう。とうてい男女平等の教団とはいえません。また、壇信徒がおこなう葬儀・法要などに読誦される経典や宗祖も含めて教団の関係者の言説に女性差別表現がまったくない、と断言はできません。仏教・仏教界の女性差別に関心をもってほしいと念じながら、本書を書きました。社会的弱者が生きやすい社会をめざすのが、仏教だと思います。もちろん宗教はすべてその願いをもつ

ているはずです。女性差別は、すべての人にかかわります。そして、他のすべての差別にも関係します。わたしの願いは、すべての人がジェンダーの視点をもってほしいことです。その願いがいつかかなうことがありますようにと、本書を著しました。

最後に、編集者の久保則之（あけび書房代表）さんへのお礼です。2017年に『自分らしい終末と葬儀の生前準備―「生老病死」を考える』を編集・出版していただいたときは、東京と京都府木津川市とが離れていたこともあり、本ができあがるまで、一度もお会いすることがありませんでした。もちろん電話では何度も話しましたし、信頼ができる人だと確信していました。本の出版記念会を東京で開いたとき、初めて久保さんご夫妻とお会いしました。おつれあいも原稿を丁寧に読み、意見をいつてくださっていました。お二人の人柄に直接触れ、関係が実を結んでいくのを感じました。

だから、本書の編集・出版は躊躇なく久保さんにお願いしました。最初の原稿から刊行に至るまでメールと電話が何度往復したことでしょう。原稿の内容に親身になって相談ののつてもらったことは、一編集者を超えての関係から生まれたと感謝の気持ちで一杯です。ほんとうにありがとうございます。

2020年1月14日

源 淳子